桜舞 さくらまい

花征きて

「忘れてはいけないこと」があるから

演激集団 INDIGO PLANTS

【東京公演　協賛】

株式会社三原真珠・三原珠紀後援会・藤田信宏後援会

【東京公演　特別後援】

MASTER・三原珠紀を応援する会・やまっちょ

【東京公演　後援】

株式会社 TOP・社会福祉法人 つみき・
三原珠紀ファンクラブ一同

【協力】（五十音順 / 敬称略）

小田初光・神崎真弓・野矢三樹・冨家規政
アイリンク（株）・アールジュー・劇団 NLT・
株式会社 MIHY プロデュース・
エン太極拳学舎・カフンタ・株式会社 GATHER・
学校法人 / 専門学校 東京ビジュアルアーツ・
有限会社ライトショップネオ

【特別出演】

肝付町公演：福留百花・吉永佳奈
鹿屋市公演：東光希・松元瑚珀

【スタッフ】

脚本：久保泰（演激集団 INDIGO PLANTS）
演出・補綴：藤田信宏（演激集団 INDIGO PLANTS）
舞台監督：清水義幸
舞台美術：江連亜花里
照明：龍野禎和 / 山家利紗
サウンドデザイン：坂出雅海
音響オペレーター（東京公演）：志和屋邦治
衣装：阿部美千代
小道具：（有）京阪商会
輸送：[肝付町] 運乗博喜 / 河野定勝
　　[鹿屋市] 葛西克治
宣伝美術：三國郷
ナレーション：谷内洋二
方言指導：永田千鶴子 / 永田千華
当日制作：日名翔
企画・製作：演激集団 INDIGO PLANTS
主催：鹿屋市教育委員会 / 肝付町教育委員会 /
　　INDIGO PLANTS 株式会社

演激集団 INDIGO PLANTS

桜舞 さくらまい

花征きて

脚本：久保 泰　演出 / 補綴：藤田 信宏

忘れてはいけないことがあるから…。

劇団HP

主宰（演出・補綴）

藤田 信宏

本日のご来場、誠にありがとうございます。
2020年に公演が決まっていた今作が、2年の延期を経てこうして開催できる事に、改めて感謝の気持ちで一杯です。そして、2020年の時からキャスト・スタッフ誰一人として欠ける事なく臨める事、この様な状況下においても劇場まで足を運んで下さったお客様とお会いできる事、これは正に奇跡だと感じています。
公演開催に至るまで、本当に数え切れない方々にご協力を賜りました。
東京公演への協賛・特別後援・後援・協力を頂戴した皆様、そして、鹿児島県鹿屋市公演・肝付町公演への御尽力を頂いた皆様に、この場をお借りしまして、心より御礼申し上げます。
鹿屋市にある桜花の碑の前で、「いつか桜花を題材にした作品を創ろう」と久保と話した2014年から、早8年が経ちました。今ここに本番を迎えても、緊張感は一層増すばかりです。
劇団旗揚げから「忘れてはいけないこと」をテーマに作品を創り続けて13年。
皆様の心に、何かを残せる作品になる事を願うばかりです。
今はただ、目の前の舞台に一所懸命取り組むことしかできません。誠実に、感謝の気持ちを持って臨みます。
ご来場頂きました皆様に、心より、心より感謝申し上げます。最後までごゆっくりご観劇下さい。

脚本

久保 泰

桜舞という作品の中には、報われずにこの世を去っていったいくつもの魂の光芒があります。いまこの時代、彼らはひたすら無口です。ならば、彼らの想いの一雫でも拾い上げ、演劇という形で彼らの願いを永遠のものとしたい。桜舞はこうした心の声に突き動かされるようにして書き上げた作品です。
この作品を通して、今は亡き人々の輝くような笑顔と未来への切実な祈りを思い浮かべて頂けたなら、多分それは時空を超え、彼らの祈りが通じたという事なのかもしれません。

東京公演

演激集団INDIGO PLANTS 第10回公演

・2022年7月28日(木)　14:00 / 18:45
　7月29日(金)　14:00 / 18:45
　7月30日(土)　14:00 / 18:45
　7月31日(日)　11:30 / 15:30

・萬劇場
　住所：東京都豊島区北大塚2-32-22

あらすじ

太平洋戦争末期に行われた十死零生の作戦があった。

「桜花作戦」

桜花とは、大型爆弾に操縦席と翼、ロケットを付け、
一式陸上攻撃機が敵艦船付近まで運び発射する特攻兵器である。
神風特別攻撃隊が編成される以前、1944年10月1日に編成された。
名を第七二一海軍航空隊。通称「神雷部隊」という。

桜花要員として鹿屋基地に赴任した秋山勇・予備少尉。
彼は未だ迷いの中にいた。生きる事とは。死ぬ意味とは・・・。
「生きる」為に命があると語る従軍看護婦・山際響子。
職業軍人として「死への覚悟」を語る陸攻隊隊長・近藤伍郎少佐。
画家になる「夢」を語る桜花整備兵・御代田啓太。
自分を取り巻く人々との掛け替えのない時間を通して、秋山は自分が進む道の、
真の意味に気付いてゆくのであった。

「蒼空～空どこまでも蒼く～」に続く海軍特別攻撃隊作品 第二章。

運命の花の征きつく先とは・・・。

桜舞 特設サイトはこちら

鹿児島県肝属郡肝付町公演

主催：肝付町教育委員会
令和4年度肝付町自主文化事業

・2022年8月11日（木・祝日）
　開演14：00

・肝付町文化センター ホール
　住所：鹿児島県肝属郡肝付町前田1020

鹿児島県鹿屋市公演

主催:鹿屋市教育委員会
令和4年度鹿屋市自主文化事業

・2022年8月14日(日)
　開演14：00

・リナシティかのや ホール（鹿屋市市民交流センター）
　住所：鹿児島県鹿屋市大手町1-1

キャストと稽古風景

藤田 信宏（秋山勇 少尉）

三原 珠紀（山際響子）

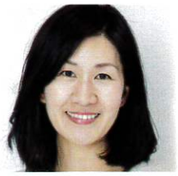
工藤 貴史（近藤伍郎 少佐）

宮崎 重信（田中元孝 少佐）

泉関 奈津子（御代田真知子）

積田 裕和（御代田啓太）

橋本 和幸（秋山吉雄）



越田 樹麗（秋山静子）

佐藤 顕紀（中西保 中尉）

島田 貴大（緒方信夫 少尉）

飯山 嘉幸（勝次）

保利 雅子（文子）

細野 大地（緒方信夫 少尉）

釣舟 大夢（中西保 中尉）

一式陸上攻撃機と桜花のスペック

一式陸上攻撃機は大日本帝国海軍の陸上攻撃機である。日中戦争・太平洋戦争で日本海軍の主力攻撃機として使用された。

●二四丁型(G4M2e)
桜花を搭載できるよう改修し、燃料タンクや操縦席の防弾装置を強化した桜花懸吊母機型。

全長	19.63m
全幅	24.89m
全高	4.11m
自重	8.050kg
全装備重量	15.500kg
最高速度	396km/h
航続距離	3,700km(爆撃) / 6,60km(偵察)
爆装	桜花11型×1機
武装	7.7mm旋回機銃×1 / 20mm旋回機関砲× 4
発動機	火星25型×2基
乗員	7名(主/副操縦手、主/副偵察手、主/副通信手、搭乗整備員)

桜花(おうか、旧字体：櫻花)は、日本海軍が太平洋戦争中に開発した特殊滑空機。特攻兵器として開発され、実践に投入された。

型式番号	MXY-7
全長	6.066m
全幅	5.12m
全高	1.16m
自重	440kg
全重量	2180kg
最高速度	983km/h(急降下時)
航続距離	37km(投下高度によって変化)＊高度7千で投下して約60km
主式装	1200kg徹甲爆弾
エンジン	固体ロケットエンジン
出力	推力800kg×3　＊毎本の稼働時間は9秒
乗員	1名(脱出装置なし)

1944年		ラバウル、トラック島、パラオ島等の前線基地が次々に機能を失い、日増しに敗色が濃くなっていった。 「どうせ死ぬのなら敵と差し違えよう」前線将兵の間には、後に「特別攻撃」と呼ばれるようになった体当たり思考が急速に高まっていく。
1944年	4月	体当たりモーターボート震洋、人間魚雷回天等の水上水中体当たり兵器の試作に踏み切る。 ※生還の可能性がない空中特攻は見送られる。
	6月	マリアナ沖海戦惨敗。空中特攻論者の勢いが増す。中心にいたのは源田実中佐。
	7月19日	「生もなく死もなく敵に体当たりを喰はせる兵こそ、神兵の名に値するのだ」讀賣新聞にて大西瀧治郎中将の体当たり論が報道される。
	7月21日	「特殊奇襲兵器」の名で水上水中特攻兵器の投入が正式に決定される。 ※空中特攻の実行も暗黙裡に了承された。 この頃、大田正一少尉が人間爆弾の構想を航空技術廠に提案。
	8月16日	「㊙（マルダイ）部品」と言う秘匿名称の元、研究試作開始。 ※その後、「桜花」の正式名称が与えられる。
	10月1日	桜花専用の特攻部隊「第七二一海軍航空隊」発足。 ※通称「神雷部隊」
	10月20日	フィリピン沖海戦において大西瀧治郎中将の元「神風特別攻撃隊」が編成される。 ※連日訓練を続けていた神雷部隊はフィリピンの神風特別攻撃隊の全軍布告(10月28日)に衝撃を受ける。 自分たちこそ先駆者だという自負が体当たりの覚悟を支えてきた彼らは自分に言い聞かせた「焦ることはない。いつかは桜花によって必ず爆戦以上の戦果をあげてみせる」と。
	11月7日	第七二一海軍航空隊は茨城県神ノ池基地への移転を完了。フィリピン戦への投入を見込み、訓練が続けられる。 ※結果、フィリピン戦で桜花作戦が決行される事はなかった。
1945年	1月18日	最高戦争指導会議が全軍特攻化を決定。
	1月20日	桜花隊第一陣と攻撃711飛行隊、戦闘306飛行隊が、鹿屋をはじめ、九州南部各基地に逐次進出、展開。
	3月1日	延べ約670機の敵艦載機が七波にわたって南西諸島方面に来襲。航空基地や艦船を一方的に叩く。鹿児島県の南部地区にも延べ70機が侵入。銃爆撃を加える。
	3月10日	B-29 325機による東京大空襲。下町全域が焦土と化し、死者10万人以上。
	3月18日	全力攻撃の火蓋が切られる。敵艦載機の空襲は延べ約1400機が九州四国方面の航空基地に殺到した。南九州各基地からは延べ110機の戦闘機が発進。多勢に無勢であった。 ※神雷部隊の戦闘機隊3隊は約半数を失い桜花攻撃の援護という本務を危うくさせた。
	3月19日	延べ1100機の敵機動部隊が来襲。18日・19日の二日間で各航空隊は大きな打撃を受けた。
	3月20日	「いよいよ桜花攻撃をやる。ろくに戦闘機の無い状態ではまず成功しない。糞の役にも立たぬ特攻など、ぶっつぶしてくれ。」野中隊隊長の野中五郎は通信長の佐伯洋少佐に遺言を残す。 ※ここから「桜舞～花征きて～」へと繋がっていく
	3月21日	第1次神雷桜花特別攻撃隊出撃。敵戦闘機の迎撃を受け、陸攻隊全滅。戦死者160名。

この後、合計10度に渡る桜花作戦の結果、桜花パイロット55名が特攻で戦死。その母機の搭乗員365名が戦死した。